

熊野那智大社の由緒

熊野那智大社伝によると「神武天皇が熊野灘から那智の海岸に上陸されたとき、那智の山に光が輝くのみをみて、この大滝をさぐり当てられ、神として祀られ、その守護のもとに、八咫鳥の導きによって無事大和へ入られた」と記されています。このように熊野那智大社の根源は、那智大滝を神としてあげられたことにあるのですが、その社殿



熊野那智大社、本宮御本殿



三峯宮境内の滝の鳥居

をお滝本から現在の社地に移したのは仁徳天皇5年(317)と伝えられています。時代を経てその後、平家物語にも出てまいりますように、平重盛が造営奉行となって装いを改め、やがて織田信長の旗打りに違ったのを豊臣秀吉が再興し徳川時代に入ってから、将軍吉宗公の尽力で享保(1716～)の大改修が行なわれたとされ、最近では昭和10年に大改修が行なわれ今にいたっております。

春になると社前の榎樹が花を満ちますが、この榎は最初、後白河法皇がお手植えされたものといわれ室町時代の図録にも描かれています。また、この樹の側には、神武天皇が大和に入られる際、道案内をした八咫鳥が、その任を授け、この石に姿を化したと言い伝えられる鳥石があります。なお、平重盛の手植えと伝えられる樹齡800年余の大楠などもあります。

社殿は六棟十三殿よりなり、それぞれの御殿は名称をもち神々を祀り熊野那智大社と称し、熊野権現、あるいは十二所権現と称し、お滝の神を含め十三所権現とよばれています。その由緒の神佛混合時代に神々と一体として祀られていた本地仏の名もかかげられています。第一殿は湯宮殿で大日貴命、第二殿は家津御子神、第三殿は熊野速玉神、第四殿は熊野夫須美神、第五殿は天照大神が祀られていますが、第四殿熊野夫須美大神が当社の御主神で、むすびの神、万物の生成、育成、すなわち生産和合の守護神として多くの人々に崇拝されてまいりました。

II-7-④

熊野速玉大社の由緒

熊野速玉大社は、景行天皇五十八年に熊野三所権現降臨の元宮「神倉山」から、現社地に新たに宮殿を造って御遷宮したことから、旧鎮座地の神倉神社に対して「新宮」と号し、御祭神は、熊野速玉男命・熊野夫須美命を主神に十二柱の神々を祀りあげ、古来から新宮十二社大権現として朝野の崇敬を集めてきました。特に孝謙天皇の御世、日本第一大靈祇所



熊野速玉大社、本宮御本殿

の勳を擧り、熊野権現信仰は熊野比久や熊野比久尼によって、一躍国家崇拝の信仰に発展していきました。境内には、熊野権現の象徴たる樹齡約千年の「榎」の大樹がそびえ、御神木として崇められ、また歴代の朝廷から賜った1,200点にもおよび古神宝は、賀皇とともて我國屈指の社宝として悪く詔書の指定を受け、熊野神宝館にて展示しています。

II-7-⑤

中世の山城

けわしい山の地形に築かれた戦いのための施設で、鎌倉時代末頃から戦国時代にかけて作られました。城主は日頃山嵐の窟に住んでいて、戦いが始まると山城にたてこもり戦いました。山城では、小さな平地を櫓や空堀で囲んだり、山の斜面を段状にするなど、敵の攻撃を防ぐための山の地形を利用した工夫がほどこされました。

II-8-①



II-8-②